

## 言語活動ワークシート（読解教材に即したA-L実践シート）

▼本資料は、読解教材に即したアクティブ・ラーニング実践のためのワークシートである。本資料の活用を通じて、実践的な授業を展開するためのヒントにされたい。

【教材名】「永訣の朝」（宮澤賢治）

【活動内容】「複数の観点を生かして理解を深める」

【課題】次の課題について、ジグソー法で理解を深める。

『永訣の朝』（二五八ページ）とは、どのような詩なのか。」

・構成と使い方

①**事前確認シート**…実際の活動に入る前に課題文について振り返ったうえで、ジグソー法の流れを確認するシート。

②**資料（A班用）**…宮澤賢治「松の針」「無声慟哭」（「永訣の朝」のテーマに関連した二つの詩）。

③**資料（B班用）**…宮澤賢治の妹トシの死について書かれた資料。

④**資料（C班用）**…宮澤賢治における「修羅」について書かれた資料。

⑤**エキスパート活動シート**…②～④で与えられた資料について班で話し合うシート。

⑥**ジグソー活動シート**…異なる資料を担当した者どうしで新しい班を組んだ後、⑤で話し合った内容についてそれぞれのエキスパートが説明をするシート。また、それぞれの説明を受けたうえで、与えられた課題について改めて話し合う。

⑦**クロストーク準備シート**…クロストークのために発表用の原稿を下書きするシート。

⑧**クロストークシート**…⑤⑥の活動で得られた考えを、⑦の原稿をもとにクラス全体で発表し合うシート。

⑨**自己評価シート**…学習を振り返って自己評価を行うシート。他者との交流を通じてさまざまな観点を得るとともに、複数の観点を生かして教材文のいっそうの理解を深める。

※シート①⑤⑥⑦については記入例を示した。

・解説

評論や文学作品の理解を深めるためには、他者との交流を通してそれぞれの考えを共有し、さまざまな観点から考えることが有効である。「複数の観点を生かして理解を深める」という活動内容を授業の中でより実践的に展開する一例として、ここでは「ジグソー法」を用いた活動を提案している。生徒一人ひとりが自分の担当した資料を主体的に引き受け、ジグソー活動を通じてクラス全体で積極的に発言できるよう指導されたい。

宮澤賢治「永訣の朝」の理解を深めるために、ここでは三種類の資料を用意した。もちろん、これら資料以外にも、方言に焦点を当てた資料、法華経に焦点を当てた資料など、別の観点からのアプローチも可能であろう。生徒たち自身に資料を探させることから活動を始めてもよい。いずれにせよ、特定のフレームワークにとらわれない自由な活動を展開されたい。

# 永訣の朝①

年 組 番 名前

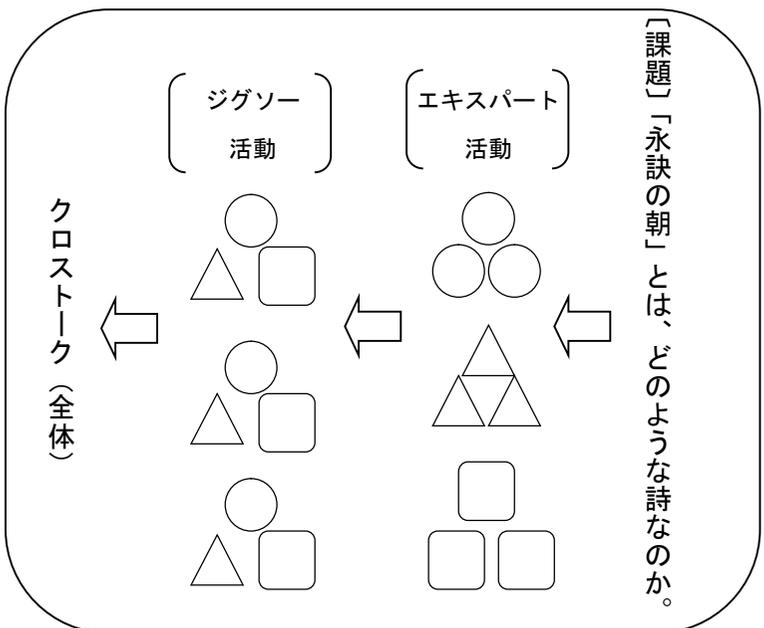
## 【事前確認シート】

\*「永訣の朝」について簡単に振り返ったうえで、ジグソー法の流れを確認する。  
〔課題〕『永訣の朝』（二五八ページ）とは、どのような詩なのか。」

### ◆キーワード・論点の整理

### ◆ジグソー法の流れ

- I メイン課題の共有  
与えられた課題（『永訣の朝』とは、どのような詩なのか。）について、各自で考える。
- II エキスパート活動  
同じ資料を担当する者同士が、「エキスパート（専門家）」として班を作り、話し合う。
- III ジグソー活動  
IIの活動で異なる資料を担当した「エキスパート」が集まって別の班を作り、IIで話し合った成果をそれぞれが説明する。
- IV クロストーク  
IIIの活動で得られた班の考えを全体で発表し合う。



## 永訣の朝②

年 組 番 名前

### 【資料】（A班用）

\*次の資料は、『春と修羅（第一集）』に収められた二つの詩「松の針」「無声慟哭」である。これらの詩は「永訣の朝」の直後に掲げられ、「永訣の朝」とテーマ的なつながりを持っている。

◆宮澤賢治「松の針」「無声慟哭」（『新校本 宮澤賢治全集』第二巻 筑摩書房 一九九五）

### 松の針

さつきのみぞれをとつてきた

あのきれいな松のえただよ

おお おまへはまるでとびつくやうに

そのみどりの葉にあつい頬をあてる

そんな植物性の青い針のなかに

はげしく頬を刺させることは

むさぼるやうにさへすることは

どんなにわたくしたちをおどろかすことか

そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ

おまへがあんなにねつに燃され

あせやいたみでもだえてゐるとき

わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり

ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた

（ああいい さつぱりした

まるで林のながさ来たよだ）

鳥のやうに栗鼠リスのやうに

おまへは林をしたつてゐた

どんなにわたくしがうらやましかつたらう

ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ

ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか

わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ

泣いてわたくしにさう言つてくれ

おまへの頬の けれども

なんといふけふのうつくしきよ

わたくしは緑のかやのうへにも

この新鮮な松のえだをおかう

いまに雫もおちるだらうし

そら

さわやかな

\*ターペンティン

terpentineの匂もするだらう

\*注・terpentine テレピン油 (松の脂から取る) のこと。

## 無声慟哭

こんなにみんなにみまもられながら

おまへはまだここであるしまなければならぬか

ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ

また純粹やちいさな徳性のかずをうしなひ

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき

おまへはじぶんにさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進しやうじんのみちからかなしくつかれてゐて

毒草や蛍光菌のくらしい野原をただよふとき

おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

\*(おら おかないふうしてらべ)

何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら

またわたくしのどんなちいさな表情も

けつして見通さないやうにしながら

おまへはけなげに母に訊きくのだ

(うんにや ずあぶん立派だぢやい

けふはほんとに立派だぢやい)

ほんたうにさうだ

髪だつていつさうくろいし

まるでこどもの苹果\*りんごの頬ほだ

どうかきれいな頬をして

あたらしく天にうまれてくれ

《それでもからだくさえがべ？》

《うんにや いつかう》

ほんたうにそんなことはない

かへつてここはなつののはらの

ちいさな白い花の匂でいつぱいだから

ただわたくしはそれをいま言へないのだ

（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）

わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは

わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ

ああそんなに

かなしく眼をそらしてはいけない

\*注・（おら おかないふうしてらべ） 「あたしこわいふうをしてるぞしよ」の意。

\*注・苹果 りんご。

## 永訣の朝③

年 組 番 名前

### 【資料】(B班用)

\*次の資料は、宮澤賢治の妹トシの死について書かれた資料である。資料を読んで、「妹トシの死」という観点から「永訣の朝」の理解を深める。

◆岡田純也「妹としの死」『宮澤賢治■人と作品』センチュリーブックス 清水書院 二〇一六

※著作権上の理由によりサンプルでは非表示にしております。

## 永訣の朝④

年 組 番 名前

### 【資料】（C班用）

\*次の資料は、宮澤賢治における「修羅」について書かれた資料である。資料を読んで、「宮澤賢治における『修羅』」という観点から「永訣の朝」の理解を深める。

◆恩田逸夫「宮澤賢治における『修羅』 苦悩・対立から調和・統一への祈願」『**【新装版】**宮沢賢治論1 人と芸術』東京書籍 一九九一

※著作権上の理由によりサンプルでは非表示にしております。

# 永訣の朝⑤

年 組 番 名前

## 【エキスパート活動シート】

\*資料を読んで考えた自分の意見をまとめたいうえで、班の他のメンバーの意見についてもメモをする。

読んだ資料 ..

◆自分の考えや意見

◆班の他のメンバーの考えや意見

# 永訣の朝⑥

年 組 番 名前

## 【ジグソー活動シート】

\*異なる資料を担当した者どうしで新しい班を組んだ後、エキスパート活動で話し合った内容についてそれぞれのエキスパートが説明をする。

| C班<br>エキスパート<br>_____さん | B班<br>エキスパート<br>_____さん | A班<br>エキスパート<br>_____さん |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
|                         |                         |                         |

\*右の説明を受けて、改めて「課題」『永訣の朝』（二五八ページ）とは、どのような詩なのか。」について話し合う。

サンプル



# 永訣の朝⑧

年 組 番 名前

## 【クロストークシート】

\*ジグソー活動で得られた班の考えをクラスで発表する。また、他の班の発表について要旨をメモしたうえで、それぞれの発表に対する感想・コメントを書き記す。

〔 〕 班の発表

感想・コメントなど

〔 〕 班の発表

感想・コメントなど

〔 〕 班の発表

感想・コメントなど

〔 〕 班の発表

感想・コメントなど

# 永訣の朝⑨

年 組 番 名前

## 【自己評価シート】

3…よい 2…ふつう 1…改善するところがある

| 評価項目   | 評価    |
|--|-------|
| ア 学習目標を確認して授業を受けたか。                                      | 3・2・1 |
| イ 意欲的に学習活動に参加したか。  | 3・2・1 |
| ウ 自分の理解したことを、他者に伝わるように説明することができたか。                       | 3・2・1 |
| エ 他者の考えを受け止め、自分の考えと比較して、複数の観点から考えを深めることに役立てることができたか。     | 3・2・1 |
| オ 他者との交流を通して考えを深め、自分なりにまとめたり、自分の考えがどのように変化したかを説明したりできたか。 | 3・2・1 |

### ◆班での活動の振り返り

エキスパート活動について

|            |  |
|------------|--|
| ジグソー活動について |  |
|------------|--|

### ◆今回の活動全体を通じての感想

|  |
|--|
|  |
|--|

# 永訣の朝①

年 組 番 名前

## 【事前確認シート】

\*「永訣の朝」について簡単に振り返ったうえで、ジグソー法の流れを確認する。  
 「課題」「永訣の朝」(二五八ページ)とは、どのような詩なのか。」

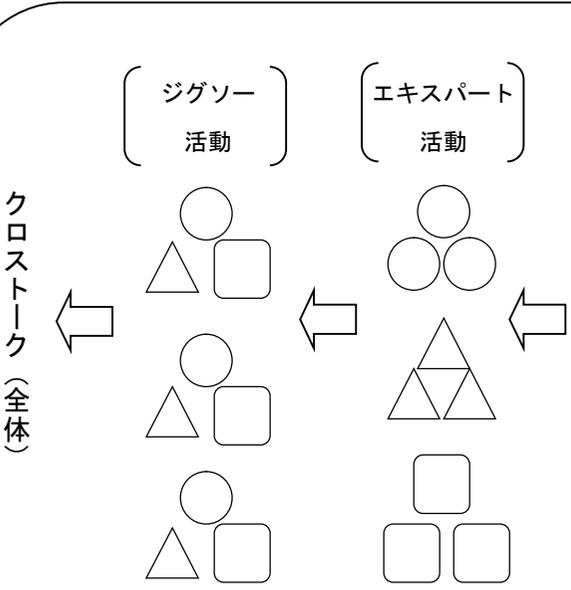
### ◆キーワード・論点の整理

|   |                            |
|---|----------------------------|
| ・けふのうちにとほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ   | ∴ 最愛の妹の死                   |
| ・(あめゆじゆとちてけんじや) / (Ora Orade Shitori egumo)                               | ∴ 賢治の悲しみ・喪失感               |
| ・うすあかくいつさう陰惨な雲／蒼鉛いろの暗い雲   | ∴ 岩手県花巻地方の方言               |
| ・ああとし子／死ぬといふいまごろになつて／わたくしをいつしやうあかるくするために／こんなさつぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ | ∴ 心情の反映としての「雲」             |
| ・どうかこれが兜率の天の食に変わつて／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ        | ∴ 死を目の前にした妹トシの兄に対する心遣い・慈しみ |
|   | ∴ 仏教用語・賢治の宗教観              |
|   | ∴ 個人から万人への祈りへ              |

### ◆ジグソー法の流れ

- I メイン課題の共有  
与えられた課題(『永訣の朝』とは、どのような詩なのか。)について、各自で考える。
- II エキスパート活動  
同じ資料を担当する者どうしが、「エキスパート(専門家)」として班を作り、話し合う。
- III ジグソー活動  
IIの活動で異なる資料を担当した「エキスパート」が集まって別の班を作り、IIで話し合った成果をそれぞれが説明する。
- IV クロストーク  
IIIの活動で得られた班の考えを全体で発表し合う。

「課題」「永訣の朝」とは、どのような詩なのか。



## サンプル

# 永訣の朝⑤

年 組 番 名前

## 【エキスパート活動シート】

\*資料を読んで考えた自分の意見をまとめたうえで、班の他のメンバーの意見についてもメモをする。

読んだ資料 … A 「松の針」「無声慟哭」

### ◆自分の考えや意見

・「松の針」の中の次のような表現が気になった。「おまへがあんなにねつに燃され／あせやいたみでもだえてゐるとき／わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり／ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた」。また、「無声慟哭」の中にも次のような表現が見られる。「わたくしが青ぐらい修羅を歩いてゐるとき／おまへはじぶんにさだめられたみちを／ひとりさびしく往かうとするか」。ここに出てくる「わたくし」とは、語り手＝書き手である宮澤賢治自身、「おまへ」とは、妹トシのことだと考えられるが、「おまへ」は「わたくし」を映す鏡のような関係にあると思った。つまり、「わたくし」は常に「おまへ」との関係性において、みずからの在り方について反省しているのではないか。

### ◆班の他のメンバーの考えや意見

- ・「植物性の青い針」（「松の針」）、「青ぐらい修羅」（「無声慟哭」）といった表現に「青」という色が使われている。そういえば、「永訣の朝」にも「青い尊采」「蒼鉛いろの暗い雲」とあって、「青」をめぐる独特の語法が見受けられるように思える。
- ・「あかるくつめたい精進」（「無声慟哭」）という表現に、「明るさ」「冷たさ」という二つの相反する感覚が読み取れるように思う。「無声慟哭」には、「何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら」という表現もあり、「悲痛」「笑い」といった相反する言葉の使用がここにもうかがえる。
- ・「永訣の朝」には、「やさしくあをじろく燃えてゐる／わたくしのけなげないもうとよ」という表現があった。「あを（＝青）」という色へのこだわり、また、「優しさ」「青白さ」といった対立するような形容表現をやはり確認することができる。
- ・もしかすると「永訣の朝」の根底には、「わたくし」と「おまへ」の対立関係、それも、単純な二項対立には回収しきれない、独特な《ゆらぎ》のようなものがあるのではないか。

## 永訣の朝⑤

年 組 番 名前

### 【エキスパート活動シート】

\*資料を読んで考えた自分の意見をまとめたうえで、班の他のメンバーの意見についてもメモをする。

読んだ資料 … B (妹トシの死について)

#### ◆自分の考えや意見

・資料の最後に、「妹の死の与えた衝動は大きく、賢治はその日まであふれ出ていた詩を、ぶつとりと止めてしまう。大正十二年六月まで続くのである。」という記述があるが、トシの死を前にした賢治の悲しみは想像するに余りある。もちろん、「永訣の朝」に描かれた喪失感を、書き手＝賢治自身の喪失感とそのまま直接結び付けることには慎重にならなくてはならない。けれども、「永訣の朝」の最後、「どうかこれが兜率の天の食に変わって／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」という表現で個人を超えた万人に対する祈りを捧げ、妹の死を超克しえたかに見えた賢治が、それでも結局詩作の手を止めてしまったことには非常に切実なものがある。

#### ◆班の他のメンバーの考えや意見

・資料には、病床のトシに対して、「看護婦をつけ、賢治も寝泊りして心を尽くして看病した。」というところが語られている。病魔に侵された妹の姿は、きつと賢治自身にも、生きるとはどういうことなのかという哲学的な反省を絶えずうながしていたように思われる。

・賢治とトシとが宗教を共有していたという事実は、二人の関係性の中で極めて重要な要素になっていたと考えられる。資料にも、「臨終前まで、賢治はとしをばげまして南無妙法蓮華経のお題目をとなえ」、「遺体の燃えつきる間、賢治はりんりんと寿量品をよみつづけた。」とあるように、二人は、法華経を通して、お互いを「運命共同体」のようなものだと感じていたのかもしれない。だからこそ、唯一の理解者である妹の死は、賢治の心に大きな喪失感をもたらしたのだろう。

・妹トシが、病床に臥していながらも「賢治と同じように賢治の歌稿に愛着を持ち、きちんと清書して綴じてくれた」という点も見落としてはいけないだろう。宗教的な共感だけではなく、詩作といった兄の文学的な営為に対するトシの理解も、二人のつながりをいっそう深めるように働いていたのではないか。

## 永訣の朝⑤

年 組 番 名前

### 【エキスパート活動シート】

\*資料を読んで考えた自分の意見をまとめたいうえで、班の他のメンバーの意見についてもメモをする。

読んだ資料 … C (「修羅」について)

#### ◆自分の考えや意見

・「永訣の朝」においては、賢治の宗教観といった主題はそれほど前面には出てきていない印象がある。だが、「永訣の朝」の収録詩集が『春と修羅』というタイトルであったことや、詩の最後に出てくる「兜率の天」といった言葉、更には、「(うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる)」といったトシの台詞を踏まえると、「永訣の朝」の背後に、賢治の宗教に対する意識が広く横たわっているようにも感じられる。資料によれば、賢治が使う「修羅」という言葉には、『まこと』に至ろうと努力しつつも、至り得ないでいることへの自省・自虐の姿があるという。「修羅」と「まこと」の間に引き裂かれるさま、そこに賢治の宗教的苦悩があったのではないか。

#### ◆班の他のメンバーの考えや意見

・仏教上の用語である「修羅」というのが六道における「人間」と「畜生」の中間に位置している、ということは、「永訣の朝」の読解にも示唆を与えてくれるように思える。資料では「修羅」のことを、「透明で正常な『まこと』の状態、などとは反対に、もやもやとして濁ってはつきりせず、割り切れないくらいらした暗い感じ」と記述している。そういった宗教的な不透明感や陰鬱さは、「うすあかくいつさう陰惨な雲」「蒼鉛いろの暗い雲」といった情景描写を通じて表現されているのではないか。

・「永訣の朝」の中に「あんなおそろしいみだれたそらから／このうつくしい雪がきたのだ」という詩句がある。空のおどろおどろしさと、真っ白な雪の清浄さと。そこに、「修羅」と「まこと」を対置する、賢治の宗教観が色濃く出ているように感じる。

・「永訣の朝」におけるトシへの賢治の献身的なふるまい。きっと、病臥に臥しているトシの苦しみとは、そのまま賢治自身の苦しみでもあったのだろう。その苦しみをどのように解消するか。詩の最後に表現された賢治の祈りは、「修羅」である自分自身へ向けられた救済の願いでもあったのかもしれない。

# 永訣の朝⑥

年 組 番 名前

## 【ジグソー活動シート】

\*異なる資料を担当した者どうしで新しい班を組んだ後、エキスパート活動で話し合った内容についてそれぞれのエキスパートが説明をする。

| C班<br>エキスパート<br>□山 さん   | B班<br>エキスパート<br>△野 さん  | A班<br>エキスパート<br>○村 さん  |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・「修羅」と「まこと」。賢治文学を理解するためのキーワード。「修羅」と「まこと」の間に引き裂かれるという、賢治の宗教的な苦しみ。</li> <li>・「修羅」≡不透明感・陰鬱さ。それが「永訣の朝」における「うすあかくいつさう陰惨な雲」「蒼鉛いろの暗い雲」という情景描写の底に流れている。</li> <li>・トシの苦しみ≡賢治自身の苦しみ。妹の苦しみを自分の苦しみとして引き受けること。「永訣の朝」の最後に表現された祈念≡賢治自身の救済への願い？</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・妹トシの死が賢治に与えた衝撃の大きさ。賢治は、臨終のトシを詠んだいくつかの詩を書いた後に、詩作の手をぶつとりと止めてしまう。</li> <li>・病魔に侵されたトシの姿が、生きるとはどういうことなのかという哲学的な反省を賢治にうながしていた。</li> <li>・宗教的な理解者でもある妹トシ。「運命共同体」のような存在。トシは同時にまた、賢治の詩作に対しても深い理解を示していた。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「わたくし」≡賢治と、「おまへ」≡妹トシとの対立関係。臨終の「おまへ」の姿が、ひるがえって、「わたくし」自身の生の在り方を照らし返してくる。</li> <li>・「植物性の青い針」（「松の針」）、「青ぐらい修羅」（「無声慟哭」）、「青い蓴采」「蒼鉛いろの雲」（「永訣の朝」）。「青」という色の独特な語法。</li> <li>・「あかるくつめたい精進」（「無声慟哭」）、「やさしくあをじろく燃えてゐる」（「永訣の朝」）といった表現。相対立する形容表現。（≡二つのものの間の独特な《ゆらぎ》？）</li> </ul> |

\*右の説明を受けて、改めて「課題」『永訣の朝』（二五八ページ）とは、どのような詩なのか。」について話し合う。

- ・何か「二つのもの」の間で宙吊りにされている状態、というのが賢治の作品を理解するうえで大事な観点になるのではないか。
- ・「無声慟哭」の中に、「わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは／わたくしのふたつのところをみつめてゐるためだ」という表現がある。この「ふたつのところ」を見つめる「わたくし」を軸に、「永訣の朝」を読み直すことはできるだろうか。
- ・「やさしくあをじろく燃えている」に見られるような表現のレベルでの相克。そして、「わたくし」と「おまへ」、「修羅」と「まこと」、妹トシの苦しみと賢治の苦しみ、といった主題のレベルでの相克。
- ・「永訣の朝」の中でもとりわけ印象的な、「この雪はどこをえらばうにも／あんまりどこもまつしろなのだ／あんなおそろしいみだれたそらから／このうつくしい雪がきたのだ」という詩句にフォーカスを当ててみる。「おそろしさ」と「うつくしさ」の対立に、死にゆく妹への悲しみ・賢治自身の宗教観を読んでみる。

# 永訣の朝⑦

年 組 番 名前

## 【クロストーク準備シート】

\*クロストークのための発表原稿を作る。発表の際は、文章の棒読みにならないように注意する。

《発表原稿》

(タイトル) 宮澤賢治の「ふたつのころ」

私たちの班では、「無声慟哭」の中にある「ふたつのころ」という表現を軸にして「永訣の朝」を再読できないか、ということを考えました。「永訣の朝」の中に、「あんなおそろしいみだれたそら」から「うつくしい雪がきたのだ」という印象的な表現があります。「おそろしさ」と「うつくしさ」という相対立するような感覚が同時に賢治の中に存在しているということ。こうした二つのもの間に引き裂かれ、宙吊りにされた状態においてこそ賢治は、……